

# デジタルブック（dbook）仕様による教材開発

大日本図書C&Vセンター 原 久太郎

## 1. 05年からのデジタル教材はどうあるべきか

コンピュータ=BASICといわれた時代からデジタル教材の開発が進められていて、その後MS-DOS、WindowsとOSが変化しても、最近までCAI（Computer Assisted Instruction）としての教材開発が行われてきた。このようなコンピュータソフトのあり方は、学校にコンピュータ室が設置されてきたことと関連している。

しかし、「2005年までにすべての教室にブロードバンド回線をひき、コンピュータ2台とプロジェクターを設置する」というe-Japan構想によって、デジタル教材のあり方が一気に変わった。

明治時代から始まった黒板、チョーク、教科書、ノートを使った学校教育の形態は今でも続いており、教科書、副教材に表示された学習内容をノートにまとめるという形は、現在でも有効な学習形態であり、黒板がホワイトボードに変わっても、変わらない形といえる。

この学習形態にコンピュータ+プロジェクターが組み込まれる。

このときのデジタル教材がどうあるべきかが、教材提供側に求められている課題である。



## 2. 拡大表示、かき込み機能、オブジェクト操作

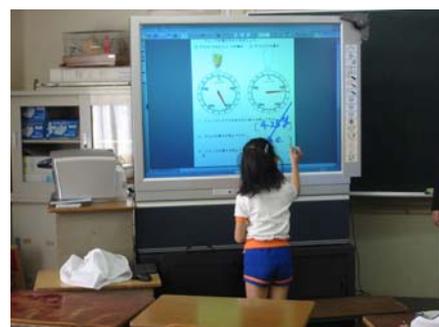
子どもの手元にある教科書（＝教育内容といっても過言ではない）と同じ内容がプロジェクターで投影されて、そこに指示内容を書き込むことができたり、注目すべき箇所だけを拡大表示できたり、教科書の図が動き出ししたりしたら、指導の仕方がちょっと変わるかもしれない。

そして、子どもが考えたことを、デジタル教科書に書き込むことができたりしたら、学習形態がもうちょっと変わるかもしれない。

紙（アナログ）メディアとデジタルメディアを融合させるのが「デジタルブック（dbook）」である。

事象を観察し、思考し、理解する舞台は教科書とノートが優れているが、学習課題をつかんだり学習場面を共有するにはプロジェクターの力が有効ではないだろうか。

教授形態、学習形態をほんの少し変えてみようとするのが「デジタルブック（dbook）」です。



佐野市立多田小学校の公開授業から

## 3. Webとの融和性と教育資源の蓄積・活用

デジタル教材を広めることを目的として、全国各地に「ライブラリー」が設置されましたが、そのデジタル教材はおそらく更新されることなく、ライブラリー自体も閉鎖されていると思われます。

教材は常に進化しています。

その進化をメディアに載せて（出版）広める（流通）役割を担うのが出版社の役割といえます。

デジタル教材も出版活動の一環として位置づけることによって、最新の情報を広めることができるのではないのでしょうか。

MS-DOS、WindowsへとOSが変わったり、フロッピーディスクからCD-ROMへとメディアが変わることにより、教材の有り方が変わってきました。

しかし、現在は、光ハイパー網によるブロードバンド化が進み、Webブラウザに対応することによってOSの違いを気にすることなく、デジタル教材の内容を研究すれば良い時代になってきました。このことは、教育資源の蓄積と進化を保障することになります。

現場の先生方との日頃の研究の成果が、教科書・教材の編集に活かされて出版されるように、デジタル教材も現場の先生方と編集者がともに研究することによってつくられ発行されていきます。

